

「民主主義と人権を守ろうとする力が経済成長を支える」

—ティアン・チュアの来日講演レビュー—

大塚照代(マレーシアの人権問題を考える会)

日時 2003年11月18日 午後6:30より

会場 江戸東京博物館会議室

開催 マレーシアの人権問題を考える会、アム
ネスティ・インターナショナル日本支部共催

ティアン・チュア氏は、現在、人民正義党の副党首であるが、国際 NGO の世界では人権活動家として、また、労働組合活動家としてそれなりに知られている。マレーシアでは、2001年4月に ISA(国内治安法)の下で一斉逮捕された“keadilan 10”のひとりで、その後の釈放運動が国際的にはティアンを中心に展開されていたこともあり、象徴的な存在でもあった。私たち、マレーシアの人権問題を考える会としては、ティアンの講演会を日本で開催するというのは、会の発足当時から一つの目標であった。ティアンは、拘留は延長されることなく2年と60日後の今年の6月に釈放となった。

ティアンの来日は、沖縄で開催された国際会議への参加が決定し実現可能となった。しかし、率直に言って、ティアンの国内での知名度と比較すると、日本での認知度は極端に低いものだった。私たちの会は、ティアンが逮捕されてからちょうど一年目を迎える2002年4月に発足した。会のメンバーがティアンの個人的な友人であったことをきっかけにしている。以来、私たちの会の単独では困難であるマレーシアからの人の招待

を、日本社会のさまざまな市民活動グループとの協同を得て何とか実現してきた。911以降の米国の「テロリズムに対する闘い」と市民社会への影響、情報化と国家管理、報道の自由とインターネットといった日本あるいは他のアジア諸国との共通のテーマからのアプローチでは、アジアの中でもぬきでた先進性というか、特性がうまく描き出されるものの、マレーシアの ISA(国家治安法)というものに正面から取り組んだテーマであるティアンの講演内容の宣伝には大変苦心することになった。マレーシアのマハティール政権が日本の政府だけでなく、市民社会にも、石原東京都知事同様に受け入れられている。

アムネスティ・インターナショナルとの共催で行ったティアン氏の講演は、私たちの思いとは裏腹に30名ほどの小さな集まりとなった。そんな中で、ティアンは会場の人たちに、丁寧なお礼を述べた。「良心の囚人」ではあるが、それが誰だったかも忘れてしまうような一枚のはがき、その一枚、一枚がどれほど大きな意味を拘束された側にとって持つのかを説明した。直接的には、世界からのティアン宛のはがきが拘置所の看守の行動を監視する役割を果たすこと、そして何よりも拘束されている本人が世界から閉ざされずに自分自身の信念を貫けることだと言っている。私自身は、ティアンと以前から知り合いだったわけでもなく、カミンティンキャンプに手紙を出したことはなかつ

た。この言葉を聞いて、そのことをとても後悔するのと同時に、信念をまげることなく今でもこうした活動を続けているティアンに改めて感心した。そして、そのようにティアンを励まし続けたはがきを送った人たちに感謝した。

ティアンの講演の論旨はとても明瞭で、「経済成長が、民主主義あるいは、人権を発展させるのではなく、民主主義と人権を守ろうとする力が経済成長を支える」というものだった。マレーシアの政治的安定は、経済成長だけをてこにしてきたからこそ、アジア経済危機となった 98 年に政治的危機が訪れたのだ。経済成長 = 政治的権力という構造が崩れたのは、マレーシアだけではなく、そうした体制をより一層悪化させていたインドネシアがある。そういう結果になることを恐れたマハティール首相は、民主主義の力をより強烈にねじふせることによって表面的に反対勢力を押しさえ込み、自ら退陣するという格好をなんとかとることに成功したとティアンは語る。マレーシアの民主主義は、成長しつつあったけれども、まだ、未成熟のものだった。しかし、この一連の出来事で大きな成長を遂げる。アンワール・イブラヒム氏の逮捕やティアンら野党政治指導者たちの逮捕と釈放は、マハティール氏がはじめから最後まで自作自演のお芝居のようなものであるという。マハティール氏のお芝居の終焉は、本当はこれからだと思わせられる。

さて、グローバル化する世界経済の中で一定程度の経済成長を遂げたマレーシアは、政治的安定を回復し維持するために変わらなくてはならなくなった。それをどのようにやるかが、新しい首相のアブドラ・バダウィ氏にもとめられている。

その時、世界が注目するのは、「アンワール氏をどうするのか。」だとティアンは言う。不当な拘束を続けるのであれば、彼はマハティールと同じと世界から見られる。同時に、マレーシアの人びとは民主化を求める。そうなると政治的安定を維持するのが困難になる。こうした不安定な国家は、地域内の他の国家にとっての不安材料に成り得る。そうなれば、ASEAN のような地域内協力は実現できないのだ。であるからこそ、マレーシアの民主化を担う自分たちのような人間が必要とされており、それは、マレーシア国内だけではなく、世界中が自分たちのような民主化勢力を必要としていることになると堂々と語った。

ティアンは、私たちの会が十分にできなかった、「なぜ、私たちがマレーシアにこだわるのか」というテーマをこの短い講演の中でとても明確に示してくれた。今、民主主義を経済発展を支えるものとして十分に成熟させることができなかった私たちの日本社会が、世界の平和を正に乱そうとしている。

「マレーシアの人権問題を考える会」は、ティアンの釈放運動をきっかけにはじまった。ティアンは釈放され、ひとつの目標が達成された。次の目標は、アンワール氏の釈放である。もちろんこれも人権問題ではあるが、政治的な色合いが大きくなる。それでも、世界を支配するグローバル化した政治権力に少しでも風穴を開けていくための一歩として必要だという確信をティアン・チュア氏は私たちにもたらしてくれたような気がする。